



CeMI 気象防災支援・研究センター
News Letter

Contents

1. 新たな「時系列情報(明日までの警報等の見通し)」
2. 『春に三日の晴れなし』
3. スギ花粉

1 新たな「時系列情報(明日までの警報等の見通し)」

現在の気象庁のホームページでは、注意報や警報が発表されると、危険な時間帯が赤や黄色で色分けされた時系列の情報が提供されています。これらは警報や注意報が発表された後でなければ表示されず、常時確認できるものではありません。今年の大雨シーズンから運用が始まる「時系列情報(明日までの警報等の見通し)」では、警報・注意報の発表に関わらず、常に情報が表示されるようになります。提供される要素は、大雨・土砂災害・風・波・高潮・雷・乾燥・大雪・融雪・濃霧・着氷・着雪・なだれ・低温・霜などです。新しい時系列情報は市町村単位で発表され、翌日までの見通しを「3時間ごと」または要素に応じて「日ごと」で示します。更新は毎日4回(5時・11時・17時・23時)行われますが、当初の想定から今後の見通しが大きく変わった場合などには臨時に発表されます。なお「警報の可能性に言及した注意報」などの運用は廃止され、その役割は「時系列情報」が担うことになります。

新たな「時系列情報」では、警報や注意報が発表されるより前の段階から、どの時間帯にどのリスクがどの程度高まるのかを把握できるため、早めの行動判断に役立ちます。自治体の皆さんにとっても、防災体制強化のタイミングを早い段階で判断しやすくなります。特に、レベル3(警報)やレベル4(危険警報)に達する可能性が事前に示さ

れることで、災害対応の“トリガー情報”として活用でき、結果的に避難の遅れ防止につながる事が期待されます。このように新たな『時系列情報』はとても有用ですので、運用開始後は、ぜひご活用ください。

新たな「時系列情報」のイメージ (出典:気象庁)

〇〇市の時系列情報 (明日までの警報等の見通し)		2026年XX月XX日11時00分発表														曜日・経過する現象
〇〇市	地域	12-15	15-18	18-21	21-24	00-03	03-06	06-09	09-12	12-15	15-18	18-21	21-24	24日		
1時間最大雨量(mm)					10	30	50	50	30	20	10					
24時間最大雨量(mm)					200											
大雨																
土砂災害																
暴風(m/s)	陸上	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5		
	海上	10	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15	10		
6時間最大降雪量(cm)																
24時間最大降雪量(cm)																
大雪																
凍結		2	4	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	2		
高潮	潮位(m)	0.5	0.5	0.5	0.5	1.0	1.0	1.0	1.0	1.5	1.5	1.0	0.5			
雷																
霧																
濃霧	陸上															
	海上															
着氷																
着雪																
乾燥	実効湿度(%)			80							90			70		
	最小湿度(%)			80							90			70		
なだれ																
砂害																
雷																

- 災害切迫** 特別警報基準を超えると予想される時間帯
- 危険** 危険警報基準を超えると予想される時間帯 (土砂災害、高潮については、危険警報発表の可能性のある時間帯)
- 警戒** 警報基準を超えると予想される時間帯 (土砂災害、高潮については、警報発表の可能性のある時間帯)
- 注意** 注意報基準を超えると予想される時間帯 (高潮については、注意報発表の可能性のある時間帯)



2 『春に三日の晴れなし』

春の天気変化を表わす言葉です。冬季、日本付近は西高東低の冬型の気圧配置となり、日本海側の地方では雪や雨が降る一方で、太平洋側の地方では晴天が続くことが多く、天気がかずれて雨や雪が降ることはあまりありません。

季節が進んで3月になると、シベリアの高気圧も次第に勢力を弱めて、日本付近には高気圧が移動性となって進んでくるようになります。天気図の上で、春が感じられるようになる季節です。日本付近に進んでくる移動性高気圧の後ろからは前線を伴った低気圧が進んで来て、冬季雨や雪の降る機会が少なかった太平洋側の地方にも雨をもたらしてくれます。雨が少なく、乾燥が続いていた太平洋側の地方にとっては恵みの雨となります。乾燥状態の緩和は、例えば山火事の危険を低下させたり、花粉症の人にとっては雨によってひと息つける時でもあります。

『春に三日の晴れなし』は、移動性高気圧が日本付近を通過する時の晴天のあと、低気圧によって天気がかずれる春の特徴的な周期変化ですが、実際には春の天気変化も年によって大きく変わります。実際の天気変化では晴れがもう少し長く続いたり、気温も天気変化に合わせるように寒

暖の変化を繰り返します。春も季節が進むと日本付近が帯状高気圧と呼ばれる高気圧に覆われて晴天が4日から5日も続くことがあります。逆に前線が南海上に停滞して、曇雨天が続くこともあり、春の天気変化の複雑さが感じられます。

また、春の天気変化に関して同じような言葉に『三寒四温』があります。これは、本来冬季のシベリアの高気圧からの寒気の吹き出しのタイミングで気温が変化する中国東北区や朝鮮半島で使われていたものです。日本では冬季よりも春に向かう季節の中で使われることが多く、低気圧の通過後、いったん気温が下がった後、移動性高気圧による晴天、気温の上昇が数日続くパターンに対応しています。

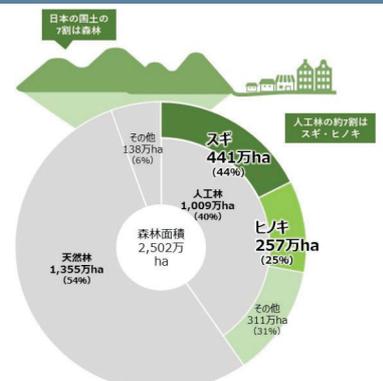
こうした春の天気変化の中で注意しなければならないのが発達した低気圧による強い風や高波、乾燥した強風下での火災の拡大、融雪による洪水や雪崩、前線の通過に伴う竜巻などの突風や降ひょうなどの顕著現象です。また、大陸から進んでくる移動性高気圧による晴天は内陸、山間部などで凍霜害をもたらすことがあります。穏やかな春の天気変化の中でも、常に防災面での備えが必要でしょう。

3 スギ花粉

花粉症の人にとって3月は大変な時期です。気温が上がって天気も良い絶好の行楽日和ほどスギ花粉が多く飛散するため、この時期は外出がままならない方も少なくないでしょう。スギ花粉の飛散ピークは年や地域によって異なりますが、一般には、3月上旬から中旬ごろとされています。

日本では古くからスギの植林が行われており、平安時代以降は建築材や木材として利用するために植林が盛んになりました。つまり、スギ花粉自体は昔から飛んでおり、花粉症に似た症状を訴える人も100年以上前から確認されています。ただし、現代のように多くの人々が花粉症になる状況ではありませんでした。その背景には歴史的な森林利用の変化があります。太平洋戦争中、資源が不足していた日本では、森林資源が貴重な材料として大量に利用された結果、乱伐が進み山々は荒廃しました。戦後しばらく続いた大きな水害の一因とも考えられています。こうした状況を受け戦後には森林の再生と資源管理の必要性が認識され、経済成長も追い風となって、スギの大量植林が行われました。林野庁の統計によれば、日本の人工林のうちスギは44

%を占めます。ヒノキも25%を占めており、ヒノキ花粉症の患者が多いことも納得できます。植林されたスギが花粉を飛ばすようになるまでには20~30年ほどかかることとされています。戦後に植えられたスギが成熟した1980年代後半から1990年代にかけて、花粉の飛散量が急増し、スギ花粉症患者数も急増しました。その後もスギ花粉症の患者は増加傾向にあり、これは気温上昇に伴う花粉量の増加や大気汚染、生活様式の変化などが要因として考えられています。スギの伐採や他樹種への植え替えなどの対策も進められていますが、森林の更新には長い時間を要します。効果が実感できるまでにはなお時間がかかるでしょう。当面は、環境省や民間気象会社が提供する花粉の飛散状況や予測情報を活用し、一人ひとりが適切な対策を講じることが大切です。



森林面積に占めるスギ・ヒノキ人工林の割合 (出典:林野庁)



掲載内容へのご意見、そのほかサービスに関するご相談・ご要望などございましたらお気軽にご連絡ください。

NPO法人 環境防災総合政策研究機構(CeMI)

気象防災支援・研究センター

〒160-0011 東京都新宿区若葉1-22ロヤル若葉105号
<https://www.npo-cemi.com/center.html>

☎ 03-3359-7971

☎ 03-3359-7987

✉ advisory@npo-cemi.com

